

『訳解笑林広記』の諸本

― 見返し・奥付を中心に ―

荒尾 禎 秀

要旨

『訳解笑林広記』は、江戸期に日本に将来した中国笑話集の一つ『笑林広記』の、訓点付きの抄出和刻本である。本書はよく読まれたもののようだが、その出版状況は明らかにされていない。そこで本稿では見返しと奥付を中心に、明らかにしえた範囲でその流布状況を報告する。結果として、本文は同一の板本による出版であるが、文政十二年以来明治十六年に至るまでの五十年間に、少なくとも十二種類の異なったテキストが得られた。このことは本書が広く流布した証しであると考えられる。ただし、取り上げたものの以外に調査を要するテキストがあり、本稿で取り上げたものについても本文の文字や罫線の欠刻の比較調査が終わっていないので、発兌の順序などは判断としていない。諸本の本文の文字や罫線の欠刻を考慮すれば、より詳しく印刷された回数や頒布の状況が明らかになる。

なお、本稿が、本書の流布状況を明らかにしようとした目的は次にある。江戸期末から明治初期にかけての新漢語盛行を可能にした基盤的環境は何だったか。これについて、中国渡来の白話小説や中国笑話集の和刻本、あるいは繁昌記や狂詩などの漢文戯作の流布が、直接ないし間接に関わっていたのではないかと仮説する。このことの検証の一段階として、稿者はこれまで漢文笑話の和刻本の流布状況を和刻本『笑府』、『訳解笑話』について明らかにしてきた。本稿もそれに連続する一つとして位置付けている。

一

本稿では和刻本の漢文笑話の代表の一つである『訳解笑林広記』について、その流布状況を述べ、もって江戸後期から明治初期の間における漢文笑話の盛行の事実を主張したい。

中国の白話小説は日本に将来して読本などに影響を与え、笑話本は同様に噺本などに影響を与えたことは定説であるが、これらが日本語にどのような、あるいはどの程度の影響を与えたかについては、さほど明瞭には実証されていない。和刻本の漢文笑話は漢文学習にも用いられたようであり、また繁昌記や狂詩などの漢文戯作はその用語の

点で注目される資料である。日本での「漢文笑話」の流布状況を考えるとき、白話小説のそれとも考え合わせて、日本語にも何らか関わる場所があったことは考えられる。稿者はこの問題を考えるために、これまで和刻本『笑府』および『訳準笑話』について、その流布状況を発表してきた。^(注1)江戸時代後期から明治初頭にかけての、版本の増刷りが一般にどうであったかを知らないもので、比較なしにものを言っているが、いずれも何回も刷られており、したがってよく読まれたものと推定している。伝統的な漢文とは言えない漢文体の資料の語彙が、幕末明治期の日本語の語彙にどのように関わったか。明治期の新漢語の盛行と関係するのか。その問題については今後も考えていきたい。今は、その基礎作業として、『訳解笑林広記』が如何に広く行われたかを、書誌的に示す。(なお、本稿では漢字について、所謂新字体のあるものはそれによった。)

『訳解笑林広記』は、中国の笑話集『笑林広記』から三百五則を抄出し、^(注2)訓点、訓読を施して文政十二(一八二九)年に刊行されたと考えられている和刻本である。

原本『笑林広記』は『笑府』に続いて清代に刊行された。「中国笑話書の総集。我が国で抄刻された各種の笑話の語柄はほとんど本書に包摂される。」^(注3)とあるように、笑話本において重要な位置にある。これを和刻したものとしては、見返しに「安永七年新刻」とある『笑林

広鈔』^(注4)が早いが、『訳解笑林広記』より所収話数、丁数ともはるかに少なく、現存する部数も著しく少ないようである。これに対して『訳解笑林広記』は現存数は多く、『笑林広鈔』より相当広く流布したものと考えられる。そのことは式亭三馬『浮世床』初編に村学究の言葉として「笑話は漢がおもしろい」と、『開巻一笑』とともに「遊戯堂主人が笑林広記」を挙げることに^(注5)も見てとれる。

よって、和刻本漢文笑話の流布状況を検討するには、本書もまた重要な一書と言える。

『訳解笑林広記』は相当数が残存している。流布状況の一層正確な把握のためには、本文中の罫線や文字に見られるキレや欠刻も調査としては重要である。残念ながら、未だそれは一部分にとどまる。そこで、本稿は、見返しと奥付による諸本の分類の報告を行う。手持ちの諸本と最小限の現物調査をしたうえ、問い合わせによる調査を行った。ただし、本稿では記述はできるだけ確実な範囲にとどめた。このため調査回答を直接盛り込むことは少ない結果となった。とはいえ、これらの回答によつて、推測が一層可能となり、記述の確実性を増すことができた。本稿は未完成である。後日、この回答をもとに、欠刻等の調査を加えて、より正確な書誌の報告を行いたい。

二

『訳解笑林広記』（以下、本書という）の初版初刷りの本を特定することは今できないが、恐らくこのようであろうと考えられる書誌を以下に述べておく。具体的には後述の（Ⅰ）として分類したものがそれに相当する。

〔表紙・題箋〕 230×157ミリ。子持ち題箋「訳解笑林広記 一（一四）」
159×14ミリ。

〔冊数〕 四冊

〔見返し〕 「遊戯主人纂輯／一嘆道人訳解」／笑林広記 全四冊／
東都書房玉巖堂発兌、単梓有野三行。欄上に「文政己丑新鐫」。
紙色は黄色。

右以外には出版年にかかる記述はないので、この年（一八二九年）
の刊と考えられる。

訳者「一嘆道人」については、遠山荷塘する説がある。^{（注6）}

〔奥付〕 単郭有野。右半分には書目三行、左半分に書肆名。「諺解校注
古本北西廂記」「元王実甫填詞／荷塘先生注訳」 近刻／ 覚世名言
一名十二楼 「清李笠翁述／荷塘先生訳解」 同／ 諺解注釈琵琶記
「元高則誠填詞／荷塘先生注訳」 同。

「京都 植邨藤右衛門／大坂 秋田屋太右衛門／河内屋茂

兵衛／江戸 和泉屋庄次郎／和泉屋金右衛門梓」。

〔序・目次・本文丁数・内題〕 「序」三丁、目次一丁。「目次」には「上
巻」に「腐流部」以下都合五部、「下巻」に「世諱部」以下都合六
部を示す。本文は全巻合わせて九十一丁。柱題「笑林広記上」とし
て、一〇二十三・二十四・四十九、柱題「笑林広記下」として、一
〇十九・二十〇・四十二。各部の最初の丁の柱題には小字で部名を添
える。

本文初丁の内題は「訳解笑林広記巻之上」。次の二行に「遊戯主
人纂輯 一嘆道人諺解」「粲然居士参訂 艾草山人校閱」とある。
他の箇所にはこの二行はない。柱題は「笑林広記上（下）」。

〔本文〕 訓点付の漢文体で、単語や句の意味を示す左振り仮名が多く
施されている。

三

概況は右の通りであるが、諸本を見るに異同のあるのは、〔冊数〕、
そして〔見返し〕の紙色、二行目、三行目、欄上、及び〔奥付〕である。（こ
のほか、当初はなかったが後には巻末に数丁（枚）の書目を持つもの
がある。）

従って、奥付及び後述（Ⅱ）の見返し以外は、版本はすべて同一で

ある。

本文の文字の欠刻、罫線のキレの調査は一部分を除き、未調査である。したがって、諸本がどの順序で印刷され頒布されたかは今は決まかねる。しかし、右の異同部分を整理すると、文政から明治期に至る約五十年の間に、少なくとも十二種類を得る。また、その順序性も内部徴証から推定できるところもかなりある。この十二種類は印刷回数とは違うが、何らかの事情が生じて版木に手を加えた回数ということであり、したがって、少なくとも十二回は（本文はすでに印刷されたものを使うことがあるにせよ）、いわば「装いも新たに」発売された、えよう。^(注)近世後期において、一つの書籍が通例何回程度増し刷りをするのか、どのくらい「装いも新たに」頒布するのか、知るところがないので比較ができないが、主観的には結構長い期間、よく読まれた書籍であると考ええる。

以下、推定できる範囲での発売順を考慮しつつ、異同箇所を中心に諸本の類別を記述する。^(注)類別番号の下に記したのは、その類の特徴的な書誌情報を凝縮させたものである。「所蔵」については推定のものには*印を付した。

四

(1) 「玉厳堂 印なし」／全四冊・三都五書肆

先に示した書誌に該当する本である。見返しの上三行目「東都書房玉厳堂発兌」の末尾に蔵版印のあるものもあるので、これを区分するため(1)類を「印なし」と明示する。

この類のものにも刷の違いが四種類はあることを記しておく。すなわち、例えば下20ウ6「奇」の送り仮名「ト」の右罫部分にキレがある①、加えて下18才柱の丁付け「十八」の「十」に欠刻がある②、さらに加えて上23ウ4「有」の左の返り点「二」に欠刻がある③、いずれにも欠刻がないもの④である。これらは、調査の範囲では(2)以降の諸本はいずれも欠刻になっている。

〔所蔵〕①②家蔵、③佐伯孝弘氏蔵本、三康図書館、④豊橋創造大学蔵本、など。

(2) 「玉厳堂 印有(六文字横長)」／全四冊・三都五書肆

〔見返し〕地色。三行目「東都書房玉厳堂発兌」の末尾の「兌」の文字にかかって蔵版印「玉厳書堂発兌」(飾り枠20mm×17mmの横長朱印)がある。

〔奥付〕(1)に同じ。

〔冊数・書目〕題簽や綴じの状態から、この類以下は見返しの記述とは違い二冊仕立てであったと推測される。

「玉巖堂藏梓目録」「東都両国／横山町三丁目」和泉屋金右衛門（七枚・丁付けなし）がある。その四枚目裏には本書の広告があり「全二冊」とする。この蔵版目録は（１）にはないと考える。

〔所蔵〕都立中央図書館加賀文庫、佐賀大学市場コレクション、など。

（３）「玉巖堂 印有（十六文字方形）／全四冊・三都五書肆」

〔見返し〕地色。三行目「東都書房玉巖堂発兌」の末尾の「兌」の文字にかかって蔵版印「江都横山街玉巖堂精選古今書籍発兌」（33mm×33mmの方形朱印）がある。

〔奥付〕（１）に同じ。「諺解注釈琵琶記」の左の罫線には「琵琶記」の間に相当する位置にキレがある。このキレは（１）（２）にはない。

〔冊数・書目〕二冊。「玉巖堂製本書目」ないし「玉巖堂藏梓目録」がある。

〔所蔵〕国立国会図書館新城文庫、*大阪府立大学、家蔵（上冊のみ）の零本）、*石川県立図書館川口文庫^⑧。

（４）「玉巖堂 印有（六文字方形）／全四冊・三都五書肆」

〔見返し〕地色。三行目「東都書房玉巖堂発兌」の末尾の「兌」の文字にかかって蔵版印「玉巖書堂之印」（20mm×20mm方形朱印）がある。

〔奥付〕（１）に同じ。「諺解注釈琵琶記」の左の罫線には二箇所^⑨にキレがある。

〔冊数・書目〕二冊。「玉巖堂製本書目」江戸横山町三丁目 和泉屋金右衛門「九丁がある。四丁目表には本書の広告がある。

〔所蔵〕家蔵、*米沢市立図書館。

（５）「玉巖堂 印有（六文字横長）／三都十書肆」

〔見返し〕地色。「笑林広記」の下^⑩の「全四冊」が削られている他は

（２）に同じ。

〔奥付〕「三都 書物 問屋／／京都 勝村治右衛門／大坂 河内屋喜兵衛／江戸 須原屋茂兵衛／同 須原屋伊八／同 須原屋新兵衛／同 山城屋佐兵衛／同 岡田屋嘉七／同 英屋大助／同 和泉屋庄次郎／同 和泉屋金右衛門」（町名以下は略す。以下同じ。）

〔冊数・書目〕二冊。「玉巖堂製本書目」九丁がある。

〔所蔵〕家蔵、石川県立図書館李花亭文庫、武藤禎夫氏蔵本、*慶応大学、など。

（６）「玉巖堂 印有（六文字横長）／江戸等十二書肆」

〔見返し〕地色。「笑林広記」の下^⑪の「全四冊」が削られている他は（２）に同じ。

〔奥付〕「京都 出雲寺文次郎／同 村上勘兵衛／大坂 河内屋喜兵衛／同 秋田屋太右衛門／同 伊丹屋善兵衛／尾州 永樂屋東四郎／江戸 須原屋茂兵衛／同 須原屋伊八／同 山城屋佐兵衛／同 須原屋新兵衛／同 岡田屋嘉七／同 和泉屋金石衛門版」。

〔冊数・書目〕二冊。「玉巖堂頒行并製本書目 江戸横山町三丁目 和泉屋金石衛門」十枚とその前に「大日本史二百四十三巻」で始まる一枚がある。

〔所蔵〕家蔵（見返しと同じで、かつ魁星印付きの包紙あり。）、*九州大学音無文庫、*関西大、など。

〔7〕「玉巖堂 印有（十六文字方形）／江戸等十一書肆」

〔見返し〕地色。笑林広記」の下「全四冊」が削られている他は（3）に同じ。

〔奥付〕「三都書物問屋」とはあるが、実際は三都に尾州が加わる。「和泉屋金石衛門板」と「板」を用いている。

〔三都 書物 問屋／／京都 勝村治右衛門／大坂 河内屋喜兵衛／同 秋田屋太右衛門／同 河内屋茂兵衛／同 伊丹屋善兵衛／尾州 永樂屋東四郎／江戸 須原屋茂兵衛／同 須原屋伊八／同 山城屋佐兵衛／同 岡田屋嘉七／同 和泉屋金石衛門版」。

〔8〕「玉巖堂 印有（六文字横長）／東京他三都十二書肆」

〔見返し〕地色。（7）に同じ。

〔奥付〕須原屋茂兵衛以下の住所が「江戸」から「東京」になる。明治時代になつての刊行であろう。

〔冊数・書目〕二冊。書目はない。

〔所蔵〕豊橋創造大学蔵本、*大妻女子大学。

〔9〕「玉巖堂 印なし／東京等十一書肆」

〔見返し〕黄色。「笑林広記」／東都書房玉巖堂発兌

〔奥付〕（6）の書肆のうちの「岡田屋嘉七」を削り、その部分は空白。

また「須原屋茂兵衛」以下は「江戸」から「東京」に変わる。明治

期の刊行であろう。

〔冊数・書目〕二冊。書目はない。

〔所蔵〕三康図書館、京大人文科学研究所、*大妻女子大学。

〔10〕「玉巖堂 印なし / 文久三年東京版」

〔見返し〕黄色ないしは桃色。(9)に同じ。

〔奥付〕「文久三癸亥春鐫 / 頒行書林 東京横山町三丁目 / 和泉屋金石衛門」。

「文久」の年号を持つが、明治になっての刊行であろう。^(注10)「癸亥春鐫」とあるが奥付は新版ながら、本文も従来のもと同じ板木である。

〔冊数・書目〕二冊。書目はない。

〔所蔵〕東京大学、*九州大学雅俗文庫。

〔11〕「奎文堂 明治十六年版」

〔見返し〕黄色。全面新たに彫り直したもので、書体も他とは違う。

蔵版印はない。

「遊戯主人纂輯 / 一嘘道人譯解」 / 笑林広記 全二冊 / 東京書房奎文堂蔵版。「全二冊」は横書き。匡郭上部にあった「文政己丑新鐫」も消えた。

〔奥付〕「明治十六年十一月六日求版 / 東京 日本橋区呉服町六番地

奎文堂蔵版」。

この後に罫線を境界に書籍の宣伝がある。その書目は「説史雜詠・笑林広記・李忠定公奏議選・岳忠武王集・中唐十家絶句」の五書。うち「笑林広記」には「中本 二冊」とある。なお、序、目次、本文は従前の板による。

「奎文堂」については知るところがない。

〔冊数・書目〕二冊。書目はない。

〔所蔵〕上田市立図書館、京都大学谷村文庫、共立女子大学、*関西大学増田文庫、など。

〔12〕「温故堂版」

〔見返し〕赤色。(9)の「玉巖堂」部分に「温故堂」^(注11)を埋木したものと推測される。蔵版印はない。

〔奥付〕不明(白紙)。

〔冊数・書目〕二冊。

〔所蔵〕*慶応大学。

見返し		奥付		玉巖堂									
見返し		奥付		全二冊		×		全四冊					
印	なし	印	なし	16 文字 方形	6 文字 方形	印 なし	6 文字 方形	16 文字 方形	6 文字 横	印 なし			
						(4)	(3)	(2)	(1)	5 書肆	刊年なし	江戸	
			(5)							10 書肆			
		(7)								11 書肆			
			(6)							12 書肆			
				(9)						11 書肆			
			(8)							12 書肆	文久三	東京	
				(10)						1 書肆			
	(11)									1 書肆			
(12)										刊記？	？	？	

国立国会図書館新城文庫本とは書目が違い、(2)と同じ「玉巖堂藏梓目録」七枚がある。別の類である可能性もあるが、いまはこの類に含めておく。

なお、この川口文庫本には注目すべき貼紙がある。「序」1表の右上に水色の古書目録の切り抜きが貼られている。

「1102 笑府 十三巻 墨憨齋主人編 中型／武陵藏版 明末刊 極稀」四三八、〇〇〇(ペン書きで「笑府」「四」を丸で囲み、金額には傍線を付す。)

この目録の記述は明らかに原本『笑府』四冊についてである。いつの古書目録かわからないが、この本はどこに買い取られたのか。

注10 明治期刊行のものが江戸末期の刊年を残すことはある、ということについて、渡辺好久児・内村和至「江戸文藝文庫」蔵書解題(三) 水野稔旧蔵書・詩歌類I(明治大学図書館紀要8・2004年)の記述(いま要約する)が参考になる。

「目録の13『増補文語粹金』は、刊記は「東京書屋 須原屋茂兵衛」他であるが、その中途の巻最終丁に「弘化四年丁未正月 東都書林 下谷 御成道 英文藏梓」とある。これについて、「明治になってから刊行されたものと思われる。」

注11 「温故堂」は甲府市常磐町四番地(或 三十八番地 或八)内藤傳右衛門か。

「温故堂版」は、慶応大学蔵本以外は所在を知らない。そのデジタル画像では見返しの字体から諸本の見返しと同板と見たが、右の匡郭及び中央の「笑林広記」の左側罫線」のキレの状態が、他の諸本の様相といささか異なる様である。

A Bibliographical Study of *Yakukai syourinkouki* (訳解笑林広記)

ARAO Yoshihide

Abstract

In the Edo period, famous modern Chinese novels and humorous stories were imported and printed in Japan. They had an influence on shin-kango (新漢語) in some ways in the early Meiji period.

In order to provide support for this idea, this paper examines the extent to which the type of classical Chinese writing known as *Yakukai syourinkouki* (訳解笑林広記) were read. These books were extracted and printed in Japan from Chinese *Syourinkouki*. (笑林広記).

The results of our bibliographical survey show that in the 50-year period from 1829 in the Edo period extending into the Meiji period these were issued at least 12 times. However, there are some prints using the same block.

This survey is incomplete, but even the results up to here make it clear that these books were widely read.